

初夏の森の小さな太陽 キツネノサカズキ (*Galiella japonica*)

藪 雨紀子

●キツネノサカズキとの出会い

それは里山の遊歩道のすぐ脇にあった。

場所は宮城県仙台市。初めての出会いは2010年6月初め。見つけたのは本当に偶然で、たまたま近くにあった別のキノコを見ようとしゃがみ込んだ時だった。

上部が開いた不思議な形。外側は黒い色、中はキャラメルのような茶色。ビロード状の短く黒い毛をまとい、横から見るとティンパニーのような形。高さ1.7 cm、直径1.5 cmほどの小さな物体だった(写真1)。



写真1

何だろう?キノコ? 腰を落として辺りを丁寧に探すと、同じようなものが他にも数個ある。

そっと抜いてみると、基部にはリター(地面に堆積した赤松の落ち葉や枯れ枝)が絡みついている(写真2)。



写真2

持ち帰って手持ちの図鑑を調べた。あった!『北陸のきのこ図鑑』にそれらしいキノコが!名前はキツネノサカズキ。初めて見つけたのは岩手県奥州市らしい。学名の命名者には仙台に縁の深い安田篤先生の名前もある。しかも見つかることはかなり稀だという。なんと魅力的なキノコだろう!とわくわくした。

それから毎年同じ場所に会いに行った。初めての出会いから、かれこれもう10年以上が経過する。

●キツネノサカズキの成長観察

ある年、成菌の近くにキツネノサカズキの黒い外皮と同じ色、同じ質の、1 cm弱の棒状のものを見つけた。きっとキツネノサカズキの幼菌だ!どんな風に大きくなるのか見てみたいと思った。

その年は足しげく幼菌の元に通い続けた。休みの日、仕事が終わってから、3日と空けずに会いに行った。

森に住むキノコに会いに行くのが何より好きな私は、この時間をまるでキツネノサカズキと語らうように楽しんだ。

キツネノサカズキの成長は遅かった。ほとんどのキノコは毎日姿が変わり、1週間もすれば無くなるのに、翌日や翌々日行ってもほぼ変化はみられない。それもそのはず。観察してみてもその訳を知った。

幼菌は初め小さな棒状(写真3)。頭頂部の平らな部分の中心に小さな突起がある(ないものもある)(写真4、5)。そして上部が徐々に膨らむ(写真6)。膨らんだ頭頂部にひびが入り、裂開し始める(写真7)。その様子はメリメリと木が裂けていくようだ(写真8、9、10)。



写真3



写真4



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9



写真12



写真10



写真13

やがて頭部は星形に開く (写真 11、12)。
裂開すると開いた上部は碗状からだんだん
杯状に開いていく (写真 13)。上から見た姿
は、まるで小さな太陽! (写真 14、15)。



写真11



写真14



写真15

キャラメル色の子実層面は触ってみると弾力がある。開き始めの時は中がほぼ円状にキャラメル色だが、キャラメル色の部分はだんだん開いた外皮の内側の際の方まで広がってくる（写真16）。



写真16

老菌になると、ついには上から見ると桜の花が開いたような姿に（写真17、18）。



写真17



写真18

キツネノサカズキが幼菌から老菌になるまで、この間約1カ月ほどだった。1日2日では変化が見えないわけである。

●キツネノサカズキの発生状況

2019年6月、キツネノサカズキの研究をされている方を、発生場所にご案内する幸運な機会があった。それまでは同一の場所で出会ったキツネノサカズキの成長だけを追ってきたが、この時出会いから10年目にして初めて発生調査をしてみようと思立った。発生自体が稀だと思っていたので、調べたことがなかったのだ。

手始めにいつもの観察場所付近の赤松林の中を探してみたら・・・、あるわあるわ！数えてみると何と90個近く！

さらに菌友からたくさん発生している他の場所があったとの情報を得て、その場所に案内してもらった。そこは山道脇の赤松林。驚くことに狭い範囲に軽く100個は超えるだろうキツネノサカズキが発生していた。あたり一帯を本気で探したら、きつともっとたくさん見つけたはずだ（写真19）。



写真19

キツネノサカズキは全国的には珍しいとされているが、仙台の他の場所や公園でも見つかっており、ここでは案外普通種なのかもしれないと菌友は言う。そうだとしたらすごいことだ。でも、キツネノサカズキが他では

あまり発生していないというのは果たして本当なのだろうか？

このキノコの発生は5月末から1カ月ほど。他の多くのキノコが発生を始める前だ。幼菌はとても小さい上に目立たない黒。成長し裂開してからは、茶色の色味が加わり少し見つけ易くはなるが、茶色も赤松の樹皮が剥がれ落ちたものなどと色が似ていて、よほど意識していないと気づかない可能性が高い。

発生する場所を知っているか、はたまた偶然か、もしくはよほどの情報が無い限り、おそらく見つけることは困難だろう。つまり発見例が少ないのは、単に見つかりにくいからではないのだろうか？

私にはキツネノサカズキが、実はひっそりと日本各地に発生している気がしてならない。

●おわりに

宮城でも松枯れが広がり、発生場所も松枯れが進んでいる。このままいくとキツネノサカズキの貴重な発生環境が失われるのではないかと危惧している。

森の小さな太陽、キツネノサカズキ。初夏の気持ちのいい木漏れ日の下で、できること

ならずと静かにこの森で生きていてほしい。

現在キツネノサカズキ(*Galiella japonica*)は、クロチャワソタケ科のオオゴムタケ属に分類されている。しかしキノミタケ科に近い種であることがわかり、いずれはキノミタケ科の新属が設立されるだろうと伺っている。確かにキツネノサカズキはキノミタケに近い特徴を持っているように見える。

10年来の友人キツネノサカズキのこれからが、まだまだ楽しみでしかたがない私である。

《ある日偶然手にした千葉菌類談話会の会誌。真っ赤なタマゴタケが描かれた美しい表紙に導かれ、私は千葉菌類談話会の門をたたいたのです。研究者もアマチュアも、全てのきのこを愛する人に垣根を作らず、分かりやすく、誰もが参加しやすいきのこの会。参加させていただき、その素晴らしさに感激致しました。この会、そして吹春先生との出会いは、私の新しいきのこの扉を開いてくれました。今回会誌に投稿させていただくことは、この上ない大きな喜びです。いつの日かまた観察会に参加させていただける日を夢見ております。(藪 雨紀子)》

□

【図書紹介】 菌類が世界を救う — キノコ・カビ・酵母たちの驚異の能力

著者：マーリン・シェルドレイク，訳：鍛原多恵子，河出書房新社，2900+税，2022年1月30日発行，ISBN-10：430925439X，ISBN-13：978-4309254395

「あなたがこの文を読むあいだにも、菌類は一〇億年以上そうしてきたように生命のありようを変えている。岩石を食べ、土壌をつくり、汚染物質を消化し、植物に養分を与えたり枯らしたりし、宇宙空間で生き、幻覚を起し、食物になり、薬効成分を産出し、動物の行動を操り、地球の大気組成を変える。菌類は私たちが生きている地球、そして私たちの思考、感覚、行動を理解するためのカギとなる」(本文より)

原著『Entangled Life : How Fungi Make Our Worlds, Change Our Minds & Shape Our Futures』の日本語訳版。“「生命」の常識が覆される!”とこれまでに20ヶ国以上で翻訳された世界的ベストセラー。(編)

